

論文の内容の要旨

氏名：鄭 秀 卿

博士の専攻分野の名称：博士（工学）

論文題名：都市空間における場所に対する市民の「認識-反応」過程に関する研究

-歴史的街並み保全地区を事例として-

近年、都市を活性化するために地域社会が主体となって観光客などの来訪者を呼び込む拠点となる「空間」や「文化、歴史、産業などの地域資源」を整備・再生する取り組みが多く行われている。都市計画分野の研究においても、「空間」や「地域資源」に来訪を促す空間整備の方策を提案することを目的として、空間と来訪者の関係を分析する研究が多くなされ、成果を上げてきた。

このような取り組みで形成された空間に対して、今後は維持・管理を目的に政策を見直すことが必要になっている。とりわけ、地域の文化、歴史、産業などを資源として整備した空間は、単に観光地としてではなく、地域のアイデンティティを示す場所として整備することで、市民にその空間を、都市固有の場所として認識させるとともに、空間に対する持続的な維持・管理の必要性を示す必要がある。そのためには、空間の直接的な維持・管理の主体となる「空間内やその周辺に居住する住民(以下、住民)」を対象として、住民の空間への愛着やまちづくりへの参加意思の向上を図ることが必要である。

しかし、住民は空間に居住しながら様々な経験をすることで、その居住空間に対する特別な意識が生じ、「住民を除いた市民(以下、一般市民)」とは、その空間に対する意識の相異が存在する可能性がある。したがって市民全体の意識を向上させる政策を形成するためには、調査範囲を住民のみではなく、一般市民まで広げる必要がある。さらに、住民に特別な意識があり、それら相異の要因を分類し考察する必要があると考えられる。

以上のように、ある特定の空間を都市空間における市民の場所として整備するためには、その空間に対する一般市民の場所認識や愛着・行動(以下、反応)に着目した調査・分析も必要であるが、そのような観点からの研究はみられない。

そこで本研究は、都市空間における場所に対して一般市民の認識と反応が現れる因果過程(以下、「認識-反応」過程)に着目し、近年、地域資源を生かして形成された空間を、都市空間における「市民の場所」として定着させる同時に、一般市民の反応を誘導する空間整備の要因を導出する分析モデルの作成・検証を行い、今後の空間整備政策の作成に有意な分析モデルを提示することを目的とする。

本研究は、以下に示す7章から構成されている。

第1章「序論」では、本研究の背景及び目的を示した上で、本研究で使用する用語の定義や論文全体の構成を示した。

第2章「本研究のアプローチ及び位置づけ」では、本研究のアプローチや特徴を示すために、既往の理論及び研究の考察を行い、本研究における場所に対する定義や観点を示した。そして、場所は人々に意味があると評価された空間であり、一般市民にとっての場所は、都市空間を認識する要素の一つであることを明らかにした。

第3章「分析モデル及びアンケート調査項目の作成」では、本研究の分析モデルの作成や研究の対象地の選定を行った。まず、場所に対する「認識-反応」過程は、「空間」-「場所認識」-「反応」で構成され、メッセージ、アイデンティティ、反応の変数で変化が現れることを導いた。そして「空間」に対する価値評価によって「場所認識」と「反応」が同時に現れることはなく、「場所認識」-「反応」の過程でも価値評価の過程

が存在し、都市空間として認識されても必ず反応が現れない可能性や相異なる反応が現れる可能性を考え、本研究では、「場所認識」-「反応」に「価値評価2」を設定することにし、「メッセージ」-「価値評価」-「アイデンティティ」-「価値評価2」-「反応」にまとめた。

その上で、価値評価を基準として場所に対する「認識-反応」過程を「1段階：認識の変化過程」と「2段階：反応の変化過程」に分類した。この因果関係を基に、共分散構造分析モデルの作成を行い、モデルの妥当性を検証するために、メッセージ、アイデンティティ、反応を調査項目とするアンケート調査票を作成した。

アンケート調査の対象地は、歴史的街並み保全地区の成功事例である韓国の全羅北道全州市と埼玉県川越市を選定した。

第4章「場所に対する住民と一般市民の認識及び反応の相異」では、住民に場所に対する居住地としてのアイデンティティが存在する可能性を理論的に考察した上で、川越伝建地区を対象地として住民と一般市民の「認識-反応」過程の相異の実証分析を行った。

その結果、住民と一般市民は川越伝建地区を都市の場所として類似の割合で認識しているものの、居住場所に対して住民の強いアイデンティティによりメッセージの価値評価や反応の価値評価に影響を与え、住民と一般市民の川越伝建地区に対する「認識-反応」過程のそれぞれの変数に相異が現れることを把握した。

そのため、市民の場所として定着させるためには、調査・分析の範囲を市民全体に広げた上で、住民と一般市民に分類し、誘導要因を分析する必要があることが明らかとなった。

また、歴史的街並み保全地区に対する住民の範囲として、歴史的街並み保全地区の内部や周辺に居住しつつ街並み保全に参加する人として定義できた。

第5章「都市空間における場所に対する一般市民の「アイデンティティ」及び「反応」の多様性」では、全州市と川越市の場所を対象に、場所に対する一般市民のアイデンティティと反応の多様性を分析し、空間を「都市空間における場所」として定着させるメッセージを分析する際に必要な知見や分析モデルの設定に対する妥当性を示した。

分析の結果、全州市と川越市の一般市民は、都市空間における場所に対する多様なアイデンティティや反応が存在し、その組み合わせにより場所を各々9個、6個の類型で認識していることが明らかとなった。

具体的には、同じアイデンティティで認識しても反応が異なったり、反応が同じであってもアイデンティティが異なる結果となった。空間を、「都市空間における場所」として定着させる空間のメッセージを分析する前に、場所としてどのようなアイデンティティや反応を誘導するか考慮した上で、認識と反応に対する客観的評価を通じて分析の対象を選定する必要性を示すことができ、本研究の分析モデルに場所認識の段階を設定したことに対する妥当性が検証できた。

さらに同じ都市にある歴史的建造物であっても、アイデンティティや反応が異なることから、歴史的建造物が、政策により多様なアイデンティティや反応を示す場所として形成できることが確認でき、本分析モデルを用いて様々な歴史的街並み保全地区の事例を分析し、多様なアイデンティティや反応が現れる要因を導出すると、今後、歴史的街並みも多様なアイデンティティや反応を持つ場所として整備できることが確認された。

第6章「歴史的街並み保全地区に対する一般市民の「認識-反応」過程の誘導可能性及びその要因」では、歴史的街並み保全政策により都市空間における場所としての認識が向上した全州韓屋マウルと川越伝建地区を対象地として、対象地を都市の場所として認識している回答者の「認識-反応」過程の分析を行った。

その結果、全州韓屋マウルでは、「認識の変化過程(1段階)」には、伝統的外観や空間機能が影響を与え、象徴性、独自性、実用性がアイデンティティとして認識され、その中でも独自性が強い場所であることが分かった。また、全州韓屋マウルに対する「反応の変化過程(2段階)」には、独自性、象徴性が影響を与えていることが分かった。

しかし、実用性が影響を与えていないことから認識と反応に相異なる価値基準が存在することが確認でき、本研究の分析モデルに価値基準2を設定したことに対する妥当性や認識と反応を同時に分析する必要性が確認された。

全州韓屋マウルに対する「認識－反応」の過程では、伝統的外観や空間機能の他に「文化行事」が誘導要因として追加的に導出されることから、場所に一般市民に対する文化行事の政策を行うと反応がさらに誘導できることが確認できた。

そこで、本研究の分析モデルが場所として認識が定着されている空間に対しても反応の誘導要因を導出する分析モデルとして応用可能であることが確認された。

さらに、反応を「間接的な反応」と「直接的な反応」に細分化し、「認識－反応」の過程を分析した結果、誘導要因が異なることから今後、空間整備を行う際に空間整備の目的を考慮し計画要因を構成する必要性や本分析モデルの活用可能性を示された。

川越伝建地区の「認識の変化過程(1段階)」には、伝統的外観や観光機能が影響を与え、活動性、象徴性、独自性がアイデンティティとして判断されることが分かった。また、川越伝建地区に対する反応の変化過程(2段階)には、川越伝建地区の活動性、象徴性が影響を与えていることが分かった。

川越伝建地区に対する「認識－反応」過程には伝統的外観や観光機能が影響を与えることが分かり、分析モデルの有意性が検証された。

第7章「結論」では、本研究の総括を行い、一般市民の認識および反応を誘導するメッセージの導出に有意な分析モデルを本研究の結論として提示した。